

# 二回目の鬱陵島

2017年3月16日～22日



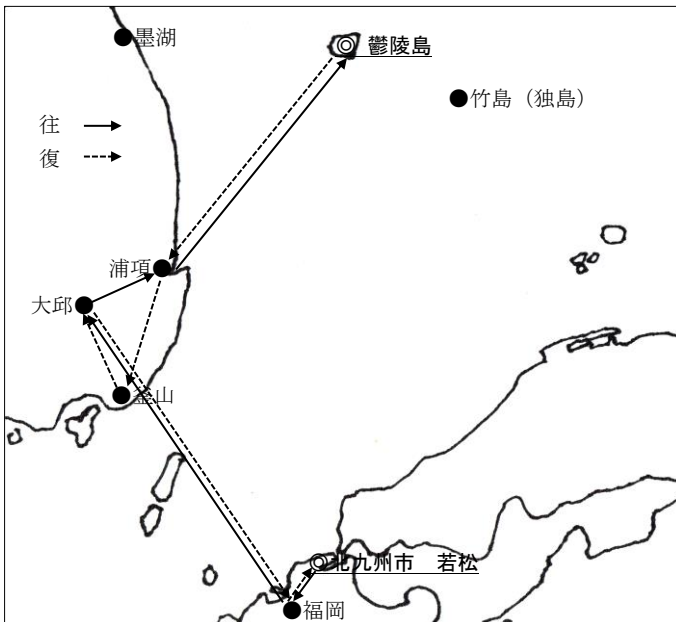
天野松男

第一日 3月16日(木)

## 福岡から大邱經由浦項へ

先ず今回の旅の経路を示す。出発地は北九州市若松で、目的地は鬱陵島である。鬱陵島行きのフェリーは浦項の他に東海の墨湖からも出ているが、私は浦項の方が近いので浦項から鬱陵島へ向かった。浦項発のフェリーは9時50分発なので、どうしても前泊しないと間に合わない。帰りは18時頃浦項に到着するので、無理をすれば帰国できるかも知れないが、博多で一泊しないと行けないかも知れない。いずれにしても往復でそれぞれ一泊しなければならない。これが旅行を難しくしている要因の一つでもある。

今回は福岡から大邱まで飛行機で行った。Air Busan の格安航空券の案内が来たのでそれを買ったのだ。しかし、少し時間はかかるがいつものようにビートルで行く方が安かった。早朝のビートルに乗れば浦項には夕方到着できる。



福岡空港まで予定通りだったが、空港で手荷物がうまくいかなかった。釜山の文集と中国旅行記をそれぞれ 10 冊ずつ持って行ったので、機内持ち込みの大きさにうまく整理できず、結局、本、衣類、あの骨だけのキャリーの 3 つに分割し、手荷物として預けることになった。このキャリーがまずかったのだ。そんなに大きな荷物ではなかったが、一辺だけ寸法が合わなかった。最初からキャリーケースを使えばよかったのだ。

名前は忘れたが、福岡空港内の銀行の両替レートは、

100 万 W=106382 円

であった。以下の文書では 1 万 W=1000 円で計算している。

大邱に到着して空港のインフォメーションで浦項までのバスの有無を聞くと、空港からの直通はないとのこと。東大邱のバスターミナルから出ているとのことであった。それで、空港から東大邱までバスで行こうと一旦バス停まで行ったが、待つのが面倒になってタクシーをつかまえた。当初は東大邱までのつもりだったが、浦項までの料金を聞くとメーターを指さした。要するにメーター走行するから安心しろという感じ。ハウマッチと改めて聞き直すと 90000W という。約一万円だ。まあ、いいか。それで浦項までそのタクシーで行った。実際のメーターは十万 W を越えていたが、払ったのは九万 W。1000 円と少し負けてもらったことになる。運転手は浦項の人ではなかったのだ。目的地のエニーモテルまで行けず、浦項のバスターミナルの近くで下りた。モテルの場所は予め調べておいたのですぐに分かった。

エニーモテルは多分ラブホテルだ。受付は相手の顔が見えないようにガラスで仕切られていて、お金とキーがやり取りできるくらいのスペースしか空いていなかった。ここには日本語が少し話せる人が働いていた。明朝のタクシーの手配をしようと受付で相談していると、話がなかなか通じず、私が日本人だと分かり、受付の人が呼んだのだ。崔珉箕 Choi Min Gi さん、36 歳。ここで働きながらアニメの仕事もしているらしい。タクシーを呼ぶ時間を 7 時半というと、私はまだ寝ている、私の部屋のブザーを押して起こしてくれと言う。ええっ、いいのと思ったが、構わないと言う。ついでに、夕食のための食堂はどっちの方向に行けばいいか教えてもらった。

夕食のために外に出た。バスターミナルとは反対方向に食堂が多いらしい。南部市場というのがあった。市場というのは面白い被写体が多い。入ってすぐ左に食堂があったのでそこへ入った。焼酎と豆素麺のような物、大きな青唐辛子、辛くはなく中には牛肉のミンチが詰まっていた、イモの天ぷらを頼

んだ。実際は食べてからその食材が分かったのであって、食べる前に知っていて選んだのではない。ここで市場のおばちゃんたちの写真を撮った。



第二日 3月17日(金)

## 浦項から鬱陵島へ、新しい出会い

朝 7 時 40 分頃崔さんの部屋を訪ねた。正直どの部屋だったかあやふやだったが、とにかくドアの横の呼び鈴を押した。応答はなかった。仕方ないので、受付で、アンネハセヨ、と声をかけたがこれも応答なし。7時過ぎは「早朝」で、皆さん寝ているのだろう。どうしたものかと思っていたら、階下から手に缶コーヒーを持った崔さんが現れた。彼は早起きしてくれていたのだ。ほっとした。韓国の人はやっぱり優しいと思った。

タクシーの予約はしていなく、流しのタクシーでいいとのことだった。ホテル前の道路を横切ってタクシーを待った。4-5分待ってタクシーが拾えた。まだ8時少し前だったが、この辺りは流しのタクシーが拾えるような地域なのだ。

見覚えのある懐かしいフェリーターミナルに着いた。8時10分くらいだっ



たろうか。フェリーの出発は 9 時 50 分だ。時間的余裕があったので少し周辺を歩いてみた。背後は住宅地で沖合は工場、という感じだ。



発券窓口では親切にも帰りのフェリーも予約してくれた。今回もパスポートをコピーされたが、老人料金だ。特にトラブルなし。今回は待合室で「日本の方ですか」と聞いてくる人はいなかった。実は待っていたのだが、二回目の渡島の私に対する警戒は解けたのかしら。無害であるのが分かったのか、誰も何も言ってこなかった。



フェリーターミナルは迎日湾の奥まったところにあるが、対岸には POSCO という製鉄工場がある。迎日湾は北九州の洞海湾よりかなり大きい湾岸に工場があるのは似ている。しかし、

迎日湾の海水は洞海湾よりはるかにきれいだ。

開かずの間の約 3 時間半の辛抱で道洞に到着した。道洞では宿泊先が決まっていなかった。まずはケイコさんに予約をお願いしていた Family Hotel、ここは観光客がまだ少ないので営業していないと知らされてはいたが、を訪ねるつもりでいた。フェリーを下り、Hotel の方へ歩いていると、あんた泊まっていきなさいよと一人のおばさんが声をかけてきた。いくらだと聞くと四万 W という。四泊するから三万 W にしてくれと値切った。Family Hotel の Back Packer 用の相部屋 (ゲストハウス) がその値段だった。少し押し問答があって、3 万五千 W になった。ホテルをあれこれ探し歩くのも面倒だったのでそれで OK した。おばさんについて行くと港から 5 分も歩かないところであった。名前は独島ペンション。おとつと、ちょっとやばい名前だ。まあ、独島問題には関わらないうからどうでもいいことだ。部屋は二部屋、ベッドと韓式のベッドなし。ベッドを選んだ。四泊分 14 万 W その場で払った。Wikipedia によると「ペンション」とは、民宿のうち、建物が西

洋風の瀟洒な外観・内装で、食事も主に西洋料理を提供する宿泊施設を指す、ということらしい。でも我が独島ペンションは全くそんな感じではなかった。でも部屋は床暖房だし、ベッドにはヒーターが敷かれていたので暖かった。

荷物を部屋に置いて「協力者」に配る本を入れる封筒を買うために外に出た。外に出て、やっぱり Family Hotel が気になって、営業しているかどうか確かめたくて寄ってみた。ホテルのフロントはホテル入り口の横にあった。営業はしているようであったがゲストハウスは営業してなく、10万W以上の私にとっては高い部屋しかなかった。まだ観光客が少なく、バックパッカーも少ないのだろう。実際3月下旬の鬱陵島はまだ寒かった。これで、独島ペンションを宿にしたことを自分で納得し、さて、次は封筒だ。私を対応した女性に「문자 (文具)」「봉투 (封筒)」と書いて示すと理解してくれて、この通りのもう一つ向こうの通りを上に行きなさい、という身振り。

言われたとおりの通りをキョロキョロしながら上っていくとそれらしい店を左側に見つけた。中に入ると誰もいなかった。アンネハセヨ、と声をかけるとちょっとして外から男性が現れた。店の主人らしい。下手な発音でポンツという、理解してくれずやっぱり字を書いて示した。そうするとそれはこう読むとばかり声を出して言ってくれたが、どう発音したか忘れた。次にサイズ、A5。これもなんとか理解してもらって、10枚、1000W だったかな。ここから面白い。日本人かと聞く。そうだと答えると、私はナガオカテイタクだという。よく理解できなかったので、名刺をもらおうとその人は이정탁

という名前の人だった。それで「이정탁 = ナガオカ」と書いて尋ねると、そうだという。鬱陵島生まれ、81歳。81歳にしては若く見えた。私が探していた文集寄稿の対象者となる人だ。その場では、後でまた来ると言って店を出て、ペンションに戻った。



ペンションに戻って袋詰め作業。釜山の文集と中国旅行記をワンセットにして9セット作った。1セットは浦項のエニーモテルの崔珉箕さんに贈呈していた。今回の旅は10セットの自著をどう配るかが課題であった。まずは独島ペンションに1冊、「管理人室」にドア越しにアンネハセヨと声をかけ

ると、日本語で言うとハイだろうとか何か聞き取れなかったが返事が聞こえた。それでドアを開けて入るとそこは居間なのか管理入室なのかよく分からない感じの部屋、でも、そこには誰もいず、右側の部屋に一人の男性が座っていた。ペンションのオーナーだろうか。その人に何と挨拶したか覚えていないが、袋詰めの著書を手渡し、そこを辞去して次の行動。

まずは全정담リーダーとラさんを訪ねるつもりでいた。傘さんはボランティア活動のリーダーであると紹介されていて、ケイコさん、訶さんとともに3人同報でメールを送っていたが、傘さんだけからは何のレスポンスもなかった。会ったこともないし、今回は訪ねてみようとして最初から考えていた。ラさんは、ケイコさんから困ったことがあれば相談してみてもいいかとアドバイスを受けていた。

### 全정담さん訪問

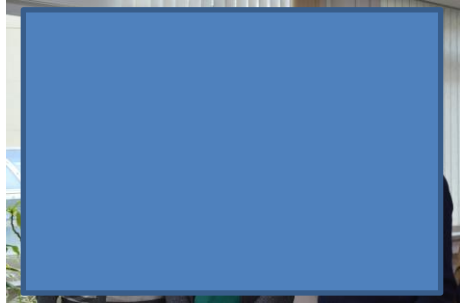
歴史文化体験センターの訶さんを訪ね、傘さんに会うことができるかどうか尋ねた。すると、訶さんが連絡を取ってくれ、議会の一階にいるとのことだった。議会の場所も教えてくれた。それで議会を訪ねた。おそるおそる建物の中に入るとなんと殺風景なところでフロアーには誰もいず両サイドにドアがあった。ドアは閉まっていてその向こうに人がいるのかどうかさえも分からなかった。右側のドアが近かったのでそちらに行くと呼び鈴らしいスイッチがあったので押してみた。するとドアが開き若い女性が出てきたので、全정담씨 있습니까?と言ったかどうか覚えていないが、私が全정담…というようなことを言うと女性は反対側のドアへ私を連れて行き、ノックし中に入った。部屋は横長で、右側の奥に傘さん、手前に二人の男性が座っていた。正面は応対用か作業用の机、左奥に多分湯茶用の流しがあった。女性は傘さんに私を引き合わせると帰った。ワタシハアマノマツオデスと自己紹介して、名刺と著書とチラシを渡した。こちらから準備した韓国語は話せるが相手からの応答は全く理解できなかった。それからの会話が大変だったが、なんとか私の目的を直接伝え、傘さんのボランティア活動の内容を示すリーフレットをもらった。

傘さんは美人であった。ボランティアのリーダーと聞いていたが、リーフレットを見て思うに、島民の自主的活動を支援する行政部門の責任者のようだ。



公務員とは思わなかった。仕事の内容は「老人 care」らしい。それでケイコさんが私に傘さんを紹介したのだ。一公務員が私の私的な活動に協力するのは難しいかも知れないが、さて、今後どう傘さんにアプローチしたらいいだろうか悩む。

最後に三人の記念写真を撮らせてくれと言うと、男性職員の一人が何に使うかと英語で聞いてきた。記念写真だと答えると、インターネット上では使ってくれるなと言う。写真を撮る時今までこんな要望を受けたことはなかったが、さすが役場の公務員は細かいと思った。それにし



ても独島博物館の館長は何も言わなかったし、博物館の受付嬢も何も言わなかったので、この人が神経質なのかも知れない。とにかく、インターネット上で使わないことを約束して記念写真を撮らせてもらった。そもそも私が写真を撮るのは記録のためだ。人の写真は誰に会ったか忘れないためだ。インターネット上で使うかどうかは分からない。

### ラさん訪問

ラさんの電話番号も教会の場所もケイコさんから聞いていたが、アポを取らずに訪問した。それらしい建物に行くと十字架が掲げられていて、名前は「독도교회」(独島教会)となっていた。よく分からないから建物へ近づいて道路から中をのぞき込んだがよく見えず、人がいる感じでもなかった。建物を覗きながら歩いていると向こうから女性が出てきて、何かご用ですか、と



言ったのだらうと思うが、韓国語だから分からなかった。それで、ラッシュイッスムニカと尋ねると、それはこっちですよ、とばかりにとりかたの建物に案内してくれた。(右奥の茶色の建物が独島教会で、手前の白い建物が統一教会)

その白い建物には十字架が掲げられていなかった。女性がドアをノックすると中から老人が現れて、女性が、日本人の方が...とか何とかいったと思うが、老人は中へ入りなさいと手招きした。女性はちょっとためらったが、私たちは言われるままに中へ入った。

そこは教会のお祈りをする場ではなく、ラさんの居室のようであった。新聞を切り抜いていたようで、新聞が広げられ、切り抜きが沢山あった。

私は、ケイコさんから紹介されてきましたと日本語で言った。ラさんは日本に数年間住んでいたこともあり日本語が上手だ。私はラさんに二冊の本とチラシを手渡して協力を依頼した。女性にもチラシを手渡した。チラシは日韓両国語併記なので女性は多分私が考えていることは理解できたと思う。

ラさんは何のために文集を作るのかといぶかしそうだった。私は日韓友好のためだと単純に答えた。そのために日本人と鬱陵島島民の交流の内容を「思い出」として語ってもらい、それを文集として整理しようと思ったのだ。そのような趣旨をチラシに書いていた。この文集は日本人が鬱陵島民に何をしていたのかの「証言」を集めるようなものだ。日本人の私としては何かいいこともあったのではないかと期待したいが、植民地支配という関係からネガティブな証言が出てきても当たり前だ。いずれにしても、ラさんからは、それはいい活動だとは言ってもらえなかった。

しかし、月曜日にあなたを「接待」したいから 11 時にここへ来て下さい、と言われた。自分がここへ赴任して人を接待するのは初めてだとも言った。私は嬉しく受け止め、その時本の感想もお聞かせ下さいと頼んだ。

独島教会の女性は教会幼稚園の園長先生らしい。ラさんが通訳してくれた。女性は、独島問題があるのになぜ来たのかというようなことを聞いた。誰しも思う疑問だ。鬱陵島が独島問題の前線であることは十分承知していたので、次のようなメモを予め作っていて、それを示した。私は独島問題については立ち入らないことにしていた。この問題について、部分的な情報だけしか知らない我々のような素人が議論しても、我が国のものだとただ主張するだけの疲労感の残る一方的な議論にしかならないと思うからである。

\*\*\*\*\*

私は日本人だから、竹島は日本のものだと思う。  
 あなたは韓国人だから、独島は韓国のものだと思う。  
 ここでは、その議論は止めましょう。

私は領土問題を話すためにここに来たのではありません。

\*\*\*\*\*

女性に本を進呈したいと申し出ると夜8時に彼女がペンションに来るということになった。ちょっと遅過ぎると思いつつも了解した。

ラさん宅でいろいろ話したが、印象に残っているのが上述のことだ。そこを辞去して坂道を下っていると、傘さんに出会ってちょっと会釈した。さらに下っているとかの園長先生に出会った。ちょうどよかった、何と声をかけたか覚えていないが、本を渡すためにペンションまで一緒に行った。

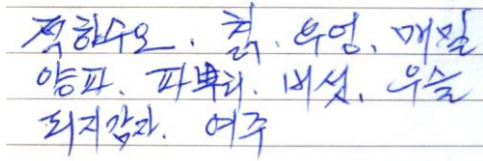
彼女はペンション前の道路で待っていて、私は部屋に戻り袋詰めした二冊の本を持ってきて手渡した。彼女はそこから誰かに電話した。結構長い間話していた。本を渡したので私の目的は果たしたのだが、彼女の電話がなかなか終わらないので、その場を離れるわけにも行かなかった。電話の相手はラさんだった。彼女が電話を私に手渡してそれが分かった。ラさんが言うには、1) 独島の名前と幼稚園は関係がなく、近々名前を変えたいと思っている、2) 私に飲み物を贈りたいが何が好きか、この二つだったと思う。

1) については、ああ、そうですかと思っただけだ。Googleの地図上で、独島教会は「ヤンムン教会」となっている。この教会にしても私のペンションにしても「独島」と言う名前が付いている。他にも「独島」何とかというのがあるかも知れない。しかし、私は独島問題に関わるつもりはないから、独島についてとやかく言うつもりはない。後で思ったことだが、政治的そして何か経済的な思惑が働いてそのような名前を付けたのかも知れない。独島の名前を冠すると特定の人々に対して受けるだろうし、結果、経済的にもプラスになるのではないか。率直に言って、この島で独島の名前を聞くとちょっと身を引きたくなるが、しかし、私が韓国語が分からないからかも知れないが、独島と日本の関係で変な議論を吹きかけられたことはない。2) については、私は何もいらないと断ったが、どうしてもと言うのなら酒がいいとラさんに伝えた。すると、教会の人だから酒はダメだとのこと。結局何ももらわなかったが、それでいいのだ。それにしても、教会の人は酒を飲まないのかしら。ワインはキリストの血、パンは肉と聞いたことがあるが。

さて、次は夕食。入ったところが三度目の正直。そんなつもりではなかったのだけど、去年6月間違って二回も行った食堂と同じ所だった。入って、あれっと思ったけど手遅れ。またビビンパと焼酎を注文。他の客はいなかつ

た。一人の男性がいたが客ではなさそうだった。女性従業員に「去年の6月に来ましたが、私のこと覚えていますか」と予め用意していたメモを示した。そしたら、覚えているわ、とか何とか言ったのだろうが、手帳を開き去年の6月に撮った写真を取り出して見せてくれた。いつでも取り出せる手帳にしまっておいてくれたのだ。嬉しいではないか。そこでまた写真を取って渡した。ビビンバを食べていると、さっきの男の人も加えて店の人も何やら料理を始めた。焼肉のようだ。うまそうな感じ。そんなものが食べたかった。それで、店の壁に貼ってあるメニューを指さして、その料理はこのメニューのどれかと聞くと、そこにはないとの返事。賄い料理だ。ああ、残念。

薬草茶をご馳走してくれた。どんな薬草が入っているのかと聞くと、聞いても分からないから書いてもらったが、10種類の名前を書いた。



以前、大邱の薬令市という漢方薬市場に行ったことがある。その一角にある「薬令市展示館」を見学した時に「우리약초꽃 408 (私たちの薬草の花 408種)」という小冊子を買っていた。これと辞書で調べて分かるものもあったが、手書きのハンブルが読めないものがあり、最終的には釜山の朴清九さんに教えてもらった。薬草の種類は次のようなものであった。

- |      |                     |
|------|---------------------|
| 적하수오 | ⇒赤何首烏 (つるドクダミ)      |
| 칩    | ⇒ (갈근) 葛根           |
| 우엉   | ⇒ (우방자) 牛蒡子 (ゴボウの種) |
| 메밀   | ⇒ (교맥) 蕎麦 (ソバ)      |
| 양파   | ⇒玉葱 (タマネギ)          |
| 파뿌리  | ⇒ねぎの根               |
| 버섯   | ⇒きのこ                |
| 우슬   | ⇒ (쇠무릎) 牛膝 (いのこずち)  |
| 돼지감자 | ⇒きくいも               |
| 여주   | ⇒ (고과) 苦瓜           |

何でも薬草になるという感じである。正直言ってこの種の物は苦手だ。あまりおいしいとは思わない。良薬口に苦しというところだろうか。

多分この日だったと思うが、夕食後ペンションの部屋でくつろいでいると、誰かがドアをノックする。ペンションのおばさんだった。このペンションのオーナーという人を連れてきた。確かにオーナーといったと思う。50歳前後のがっしりとした感じの男性だ。日本語が少しできた。名詞をくれというと車に置いているとってくれなかった。日本人が泊まっているというのが珍しかったのだろうか。それは珍しいだろうと思う。だって、ここは日韓の政治的な接点の前線基地だ。

まあ、いずれにしても、今日は文具屋のご主人の이정탁さん、独島教会幼稚園の園長さん、ペンションの「オーナー」など予想外の巡り合せがあった。おさんとラさんは予定していた人であった。独島ペンションも予想外の巡り合わせと言ふべきかも知れない。文具屋の이さんにあった時、どこに泊まっているかと聞くので独島ペンションというと（実際は独島ペンションのキーを見せたのだが）、あそこの主人と自分はチングだという。旅は観光もさることながら、未知の人々との出会いも嬉しい。

釜山のように人のつながりはスムーズに行かないが、年一回の訪島では時間がかかる。

今日はこれで終わり。

第三日 3月18日(土)

## 独島博物館、日本人居住地

当初予定は昨日終わっていたのでこの日は特に予定はなかった。新しい出会いを求めてただらうろするだけだ。



午前中は港へ行き被写体を探した。海を見ると何か落ち着く。3月はまだ観光はオフのようで、港は活気がなく、あの刺身センターは工事中であった。一隻の漁船が帰って来た。あまり大きくなかったが魚、そして大きなサザエ、巻き貝がざくざく水揚げされた。刺身センターが工事中なので港の広場で調理が始まった。観光客が今水揚げされたばかりのイカやサザエの刺身を買っていた。また、食堂の経営者だろうか、18リットル缶山盛り一杯のサザエを買っていった。サザエの値段は1kg当たり20000Wとのことだった。

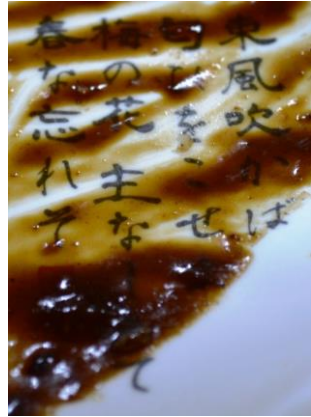
さて、食事の場所にいつも困るのだが、今日は歴史文化体験センターの隣の食堂に入ってみた。お薦めは何かと聞くと、これだというのでそれにした。いつものことだが、それが何だか分からなかったが、それにした。食べてみると何とチャーハンだ



った。それにカレーライスのように上にハヤシライスのような茶色のルーがかかっていたので食べる前はそれが何だか分からなかった。まあ、日本流に言えばハヤシチャーハンという感じ。ここまではこんな食べ方もあるなというところだ。さらに驚くことがあった。食べ終わると皿の底からあの菅原道真が出てきたのだ。

私が日本人だと分かってこの皿を使ったのかしら。後からいろんな疑問が生じたが、何も聞かずに食堂を出たのが残念。次回行ったときは聞いてみよう。

東風吹かば  
匂ひをこせよ  
梅の花 主なしとて  
春な忘れそ



次は、去年は工事中で入館できなかった独島博物館。博物館は港から 10 分くらい坂を上ったところにあるが、その少し手前に土産物屋がある。乾物屋さんで女性が店番をしていた。買い物はしなかったが写真を撮らせて下さいと頼むと、すぐに

いいよとのポーズ。色白の可愛らしいお母さんだった。

独島博物館は山の斜面に建っている。鬱陵島の建築物はだいたいそんな感じだ。入館は無料だったと思うが忘れた。この時の見学者は私意外に誰かいたかしら。もともと観光客が少ない時期だったからそんなものだろう。

日本語 Wikipedia の「独島博物館」の項によるとによると「独島博物館の八道総図のレリーフで、本来の地図とは逆に于山島の位置が鬱陵島の西から東（竹



島の位置)に移動してあり、于山島を竹島とする韓国の主張に合うように捏造されていることが下條正男によって指摘された。

(『竹島は日韓どちらのものか』文藝春秋〈文春新書〉、2004年4月)」とのこと。リニューアルされた独島博物館はそんなことも修正されたと思うが、詳しくは見なかった。説明がハングルだし、この



地に来て独島問題に立ち入るつもりがないからだ。日韓両国の主張が異なるのだから仲裁裁判所のようなところで議論すれば良いと思う。韓国の人々にもそう呼びかけたい。我々素人が「偏狭な民族意識」で自分のものだと言い張っても空虚だ。

私は日本の博物館でもだいたいあまり細かく見ない。さっと見てすぐ出てしまう。本当に知りたいことはインターネットか本で調べる。ガラス越しに展示されたものを根を詰めて見るのは疲れる。

受付嬢に李承鎮館長はいるかと聞くと、今日は土曜日で勤務日ではないのでいないという返事。アポなしだったし、まあ、仕方ないことだ。昨年、初めて鬱陵島を訪問した時、誰も知人がいないので、この独島博物館にまずは行って私を受け付けてくれた人に私の思いを伝えるつもりでいた。そしてこの時は博物館がリニューアル工事中でこれが叶わなかった。結果として、次に行こうと思っていた「일본식 가옥(日本式家屋)」で許さん、ケイコさんに会うことになった。偶然とは面白いものだと思う。今年の訪問では少し状況が変わったが、この受付嬢にチラシを渡して帰った。



写真上の英文は「Real-time Filming of Video on Dokdo」と書いてあり、画面右下には「KBS LIVE Dokdo」とある。独島の様子をリアルタイムで中継しているようだ。



博物館の手前（前ページ上の写真の W の右側部分）は「독도야외박물관」（独島野外博物館）になっている。植木がそのような文字に刈り込まれている。この野外博物館にいくつか碑が立っているが、その一つが「대마도는 본시 우리 나라 땅 對島島本是我國之地 世宗實錄卷四世宗元年」というものだ。対馬は元々われわれの領土だという主張だ。台座には「이 지도는 1952 년 임진왜란 당시 도요토미 (豊臣秀吉) 의 명령으로 구끼 (九鬼喜隆) 등이 제작한 것으로서 조선의 영토를 나타낸 것인데, 대마도가 우리의 땅으로 표기 되어 있다. 이 지도의 원본은 현재 일본 국립공문서관에 소장되어 있다.」（この地図は、1952 年 壬辰倭乱当時豊臣(豊臣秀吉) の命令で九鬼(九鬼喜隆) などが制作し朝鮮の領土を示したもので、対馬が私たちの地に表記されている。この地図の原文は、現在の日本の国立公文書館に所蔵されている。）と書かれている。



日本人が描いた朝鮮の地図に対馬が含まれているので、対馬はもともと韓国のものだという論法である。さてさて困ったものだと思うが、何の問題にもなっていないので、そういうことなのだろう。小倉紀蔵（『歴史認識を乗り越える 日中韓の対話を阻むものは何か』講談社現代新書 1819 2005 年 講談社）は次のように指摘している。

\*\*\*\*\*

「たとえば、竹島（韓国名。独島）の領有権問題に対して、韓国ではこれを『学問的な検証の結果、日本の領土と考えられる』とする学者はひとりもないが、日本にはこれを『韓国の領土である』とする有力な学者が多くいる。そして韓国の学者が『独島は韓国領』と主張する際の強力な論拠を、これら日本人学者は実証的で緻密な研究により提供しているのであり、『梶村秀樹、堀和生、内藤正中らが主張しているように』という形で韓国人学者の論文に引用されるのである。

純粋に学問的見地からいって、日本の学者の見解に複数の論が存在しうる問題に関して、韓国の学者においてはただひとつの論しか存在しえないということは、そこに何らかの政治性が介在していると考えるのが妥当であろう。

事は竹島問題に留まらない。従軍慰安婦問題にせよ、植民地近代化論にせよ、すべての歴史問題・領土問題においてこのような構造が見て取れるのである。」

\*\*\*\*\*

要するにこれは、自由であるべき学問の世界でも、韓国では政治的圧力で異論を唱えることが難しいのではないかという指摘である。異論を弾圧し「一枚岩」を保とうとしている国はいろいろあるが、韓国もその国の一つだとすれば残念である。

ついでながら、私の率直な思いを書いておこう。日本語の「わっしょい」というかけ声は韓国語が語源だという人がいた。「わっしょい」というかけ声は、広辞苑第六版によると、例えば、夏祭りの神輿を担ぐ時など、重いものを大勢で一緒に担ぐ時のかけ声だ。広辞苑は語源に言及していないが、韓国語がその語源であっても私には何の問題もない。ハングルが言語学的に世界で一番優れているという話しも聞いたことがある。

いろいろなことについて「韓国発祥」「韓国一番」という言葉を聞くと、他の日本人は知らないが、私は、またまた、という気分になる。それが事実かどうかではなく、その上から視線が鬱陶しい。このようなことは欧米人にも言っているのであろうか。それとも日本人にだけ言っているのだろうか。

田中明（「物語韓国人」文春新書 188、2001年（株）文藝春秋）は「優越意識と裏腹な自信のなさ」と指摘している。優越意識という心理的補償は朱子学に起源がありそうだ。「朱子学は、妥協を許さぬ方向へ人を駆り立てる思想」だとも言っている。かつて韓国では朱子学のイデオロギーで武装した人々がリーダーであった。

また、韓国文化に関連して小倉紀蔵は「日本や中国や西欧の多様性を否定して一面化し、そしてその否定の姿として韓国の多様性をも否定してしまう」（小倉紀蔵「韓国は一個の哲学である <理>と<気>の社会システム」講談社現代新書 1430 1998年 講談社）とも指摘している。

以上のような指摘は、いわゆる「嫌韓派」の言葉ではなく、韓国で暮らし韓国で研究し、韓国を理解しようとしている人々の学問的な指摘である。日本では韓国人の著者が韓国を批判的に描写している本も売られている。

このようなことを書くと韓国の人々は面白くないであろう。しかし、このような考えもあることを知り、「多様性」に目を向け、それを批判的に検討してほしいと思う。それが日韓友好の前進につながると信じる。

さて、話がずいぶんそれだが、次は独島展望台。博物館の隣にケーブルカー乗り場がある。7500W、約 750 円だ。ケーブルカーで望郷峰 (317.3m) という山の頂上に行き、着いた所が展望台だ。展望台には売店があり、いろいろな土産物も売っている。



展望台から独島方面を眺めるも霞んでいて、海と空の境界の水平線も判然としなかった。昨年訪ねた時はもう少し良かったが、それでもやっぱり独島は見えなかった。展望台の左下には道洞港が少し見える。フェリーが接岸していた。



次は苧洞に行った。歴史文化体験センターに寄り、許さんにバスの時間と乗り方を教えてもらい、バス停に向かった。昨年は道洞だけに滞在したが、今回は島内を周遊するつもりでいた。ところでなぜ苧洞かというと、道洞から近いし、かつて日本人

が多く住んでいた所だからだ。

明治 40 年 (1907 年) に発行された「竹島及鬱陵島」(奥原碧雲 復刻版 ハーベスト出版 松江市 2005 年)によると当時の鬱陵島における日本人居住地と日本人の数は次のようになっていた。明治 39 年 2 月の時点で 303 人の日本人が鬱陵島にいた。

鬱陵島部落別日本人在島者数

地名	戸数	男	女	計
道洞	51	113	68	181
南陽洞	12	15	11	26
通九味	9	17	8	25
苧洞	6	12	9	21
苧洞ノ内臥達里	1	3	0	3

(前ページからの続き)

天府洞ノ内竹岩洞	5	7	5	12
天府洞ノ内昌浦	1	2	2	3
臺霞洞	4	8	5	13
以下略(天野)				
合計	96	189	114	303

(明治 39 年 2 月末日調)

(出典：奥原碧雲「竹島及鬱陵島」93 ページ 復刻版 ハーベスト出版 松江市 2005 年)

また、「たけしまに暮らした日本人たち 韓国鬱陵島の近代史」(福島裕二 風響社 東京 2013)によると、1917 年 9 月 30 日現在の 540 戸、1670 人をピークに終戦の 1945 年までほぼ単調に減少している。この年の朝鮮人の戸数と人口のデータは記載されていないが、翌年の 1918 年および終戦直前の 1944 年は次のようになっている

調査年月日	朝鮮人戸数	日本人戸数	朝鮮人人口	日本人人口
1918.9.30	1445	430	8513	1503
1944.9.30	2466	109	15651	479

出典：福島裕二著「たけしまに暮らした日本人たち 韓国鬱陵島の近代史」(風響社 東京 2013 表 2 鬱陵島における朝鮮人／日本人の戸数・人口の変化(1910-1945))

日本の朝鮮支配が終わる 1945 年までかなりの日本人が鬱陵島で生活していた。日本の植民地支配という関係の中で、日本人が鬱陵島の島民にどんな影響を与えたのか知りたいと思ったので、昨年から調査のために島訪問を始めた。しかし、私が韓国語を話せないと思うように進んでいない。



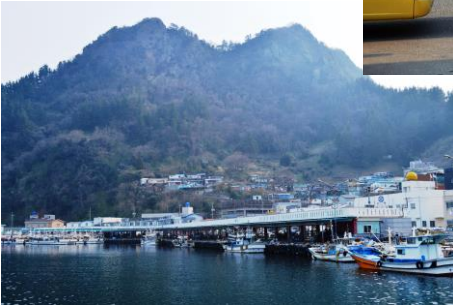
(道洞のバス発着場)



初めて乗り合いバスに乗った。道洞から峠を一つ越えると苧洞の町がある。左の写真はその峠辺りで撮ったもので、窓越しに苧洞の港が見えた。

苧洞は集落としては道洞より小さいようだが、その漁港はかなり大きい。

苧洞の漁港。全長 100m くらいはあるだろうか。



漁港に面した道路(上の写真の黄色いバスが写っている道路)から一つ左側の露地に入ると、これがメイン商店街のようであったが、まだ閑散としていた。



漁港は閑散としていたが、それでもいくつか露店が出ていた。紅色の蟹を売っていた。名前を聞くと「홍게」と書いてくれた。辞書を引くとそのまま「紅蟹」であった。この蟹屋さん、翌日道洞で会った。石昌熙さん。後でメモ帳を見てみると住所も書いてくれていた。道洞の人だった。下の帽子のお



ばさん、社長さんらしい。石さんがそう言っていた。あの店だという所に行ってみたが、工事中であった。本格的な観光シーズンを迎えるために工事中の所が多かった。



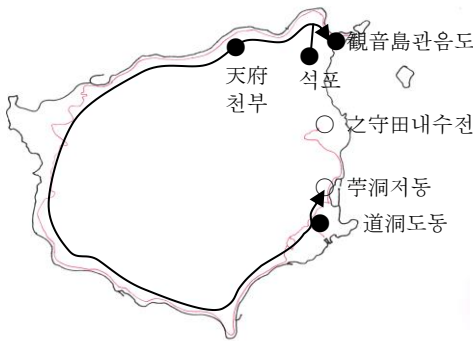
夕食をどの店で食べたか忘れたが、写真を見るとまた刺身どんぶりを食べたようだ。店主の写真も撮っているので、次回探し当てよう。



第四日 3月19日(日)

## 島の反対側に行ってみる

この日は以前から思っていたバスでの「島一周」を試みた。観音島と之守田の間はバス路線が開通していないので、完全に一周ではないがそれに近い



ものだ。昨日、苧洞に乗り合いバスで行ったのでバスの乗り方は分かっていた。

最初にバスを降りたのは天府である。天府にもかつて日本人が住んでいたため、当初から行ってみたいと思っていた。そして、その痕跡も探したかった。

もちろん文集作成のよび

かけと釜山の文集も持参して、誰でもよい、たまたま出会った人でも手渡そうと考えていた。

道洞を8時30分に出発し、途中海岸線を通り、峠を越え、そんなに快適ではなかったが、初めてのこともあり退屈しない景色であった。

写真は西面と北面の境界の峠。右下の白い石碑には「태고의 신비를 담은 북면 太古の神秘を盛り込んだ北面」とあった。これ以降太古の火山島の痕跡がいろいろなところで見られるようになる。遠目に目立つのは尖った岩や山だ。これは Wikipedia によると「岩頸（がんけい）あるいは岩栓（がんせん）、突岩（とつがん）とは、火道内のマグマが硬化してきた形成物である。火山が侵食



によって削られて、火道内の岩栓が地表に現れた地形を岩頸または突岩と呼ぶ。活火山においてはこれらの下にマグマ溜まりが存在することがあり、その



の圧力によって火山爆発が起こることがある。」というのではないかと思う。

バスは峠越えもあるが、だいたいこのような海岸線を走る。



(写真右) 前方左の車の先の建物が天府バス停。天府に着いたのは9時30分頃であった。バスを降りると、通りには人っ子一人いなかった。



さて、バスを降りてどうしようかと考えた。集落は山の斜面に広がっていたので、集落の中心当たりの道路を海岸線から山手の方に上っていった。あまり大きな集落ではなく、100m くらい歩いたろうか、学校らしき建物があり、その辺りが集落の終りのようだった。そこまで歩いて誰にも会わなかった。まあ、日曜日だからみなさん家でくつろいでいたのかも知れない。

学校辺りまで上り、それ以上行ってもあまり家はなさそうだったからそこから写真を撮りながら引き返した。



右の家は日本の家に似てないかしら。こんな感じの家が幾つもあった。この辺りで一人の男性に出会ったので声を掛けたが、返事をしてもらえなかった。その下の写真には教会の十字架が三本写っている。どれも道路の右側だったが、これをさらに下っていくと左側にもう一つ教会があった。この狭い地域に何と四つも教会の十字架が立っていた。これが韓国の文化の象徴なのだろうか。それにしてもなんとものどかな日曜日の朝だ。



最後に見つけた教会に行ってみた。教会の入り口でたまた

ま一人の女性に出会い、一方的に「私の韓国、私の日本」と「西双版纳7日間とその前後」、そして私の言いたいことをメモったチラシを手渡した。先方の女性はびっくりしたが、誰かに電話をかけ私に取り次いだ。電話で何を話したか覚えていない。ちょっと一方的すぎたように思う。



その教会を出て海岸線から一つ入った道を歩いていると、黒っぽい服を着た女性に出会った。教会にお祈りに行くのかなと思った。10時15分くらいだった。日曜日のお祈り時間は何時からか知らないが、そんな時間だろう。さらに歩いて行くと展望台の上り口があった。看板には「천부마을안내도天府村案内図」と書いてあって、この上り口は「일몰전망대日没展望台」であった。

次の予定が特になかったので登ってみることにした。上まで結構な高低差で、へとへとになったがやっとの事で上まで登った。

途中、松の落ち葉でふわふわのところがあった。私の靴は安全靴で靴底はごわごわしているが、その靴底からさえ柔らかな感触が伝わってきた。

展望台から見た天府の写真には小さいが十字架が四本写っている。



天府に行くこと、遠く（行けるところ）まで行くことが今回のバスの旅の目的であった。天府の先は何も決めていなかった。幸いバスの時刻表を天府行きのバスの中で手に入れることができた。その時刻表によると天府から「석포」行きというのがあった。석포というところがどことなく全く知らなかったがそこへ行ってみようと思った。



석포は海岸沿いの道路を右に入り幾つものヘヤピンカーブを上り詰めた山の上にあった。そこには下の写真のようなモダンな建物があった。これが何なのか知らない。バスの中から見る限り誰も歩いていないし、下車しても何だか困りそうな感じがしたので、バスを降りなかった。この建物は何だろうか。地図を見るとこの辺りには教会があったが、教会のような感じでもなかった。





このバスは、私が忖度と言わなければ、観音島直通だったのかも知れない。バスは忖度のバス停を通り過ぎ、また元来た道に戻って観音島まで行った。観音島は終点だった。

私を含めて5人くらいの客がそこで降りた。

実は私はそこに何があるのか知らなかった。前に書いたが、行けるところまで行ってみる、ただそれだけだった。バスを降りると、高い塔が立っていて、その上に何かありそうだった。先客が受付みたいところでお金を払って塔を登っていった。有料なのだ。

受付で 4000W 払って私も塔を登った。エレベーターがあったが稼働していなかった。そこにあったのは「観音塔地質探訪路」であった。トレッキングコースが整備されていて、地質も学ぼうということのようだ。(これも帰国後写真を見て確認したことだ。)いつものことだが、よくも分からず道があった



ので歩いた。大変暑かったが、天気もよかったし景色もよかった。それはよ

かったが、途中で、どこまで行けば歩けば元のバス停へ戻れるのか心配になってきた。不安を持ちつつ歩いていると、50歳前後の男女が小休止していたのに出会った。それで彼らにFinish?、ここで終わりか?というつもりで尋ねた。そしたら、



違う、という。ここのコースは周遊で Long と Short があり、Long を歩いても Enough time for bus、バスには十分間に合う、と女性が教えてくれた。それを聞いて安心、写真を撮りながらボチボチ周遊した。バス停に戻って 30 分くらいの余裕があった。それにしても「Finish?」の一言でずいぶん情報が得られた。

最初から看板をよく見ておけばよかったのだ。看板には、地理学的な観察ができるスポットが示され、A コース 350m、B コース 500m と案内されていた。Long で両方歩いても 1km 未満だから、平地ならば 20 分もかからない距離だ。おまけに地理学的なスポットの写真も撮らずに島を出てしまった。

このバス停の観音島と之守田との間はバス道路が開通していない。多分工事をしているのであろう、観音島入り口の白い塔の横に大きなトンネルがあり、工事車両が出入りしていた。

バス停の周辺をぶらぶら写真を撮っているとバスが来た。さっき降りたバスと同じバスだった。運転手も同じ人。この運転手さん、行きは少しばかり観光案内してくれたが、帰りは無言だった。天府⇄観音島のバス料金は 2000W だったが、実は、行き、小銭が



1000W しかなく 10000W 出したら釣り銭がなかった。それで行きは 1000W で来た。帰りは、観音島に入る時に釣り銭をもらっていたので小銭があった。行きに払わなかった 1000W を払えばよかったとこの文書を書いている最中に思ったがもう遅い。次回あったらそのとき払おうと思う。写真は天府のバス停で。

天府から乗り換えなしで道洞まで帰った。道洞の港はシーズン前でも人はそこそこいて写真を撮るにはいい場所だ。前も書いたが市場の建物は工事中で、浜の女たちはこの日も港の広場で商売をしていた。この二人、去年も写真を撮らせてもらったが、私のことを覚えていた。嬉しいことだ。



やはり、写真を撮ってその場で印刷して手渡すという行為が印象的なのだと思う。そんなこともあるので、「私はあなたを覚えています。나는 당신을 기억합니다. あなたは私を覚えていますか? 당신은 나를 기억하고 있습니까?」というようなメモを予め作っておいた。このメモは役に立った。

写真を撮って印刷機でガシャガシャと打ち出すと、珍しいものを見るという感じでたいていギャラリーができる。その中の一人の男性が面白がって、すごい!と言ったのかどうか分からないが、奇声を上げた。そんな人がいると私はたいていあなたも一枚いかがですかと声をかける。それがこの人だ。大変フレンドリーな人で、スマホの翻訳ソフトを使っていろいろ話をした。電話以外でスマホが初めて役に立った。彼はバスの運転手で陸地から島にお客さんを連れてきたらしい。しかし、名刺をよく見ると「라운여행사 박종철 (ラオン旅行社 朴鐘哲)」とあった。もしかして旅行代理店の社長



さんかしら。お客さんは観光バスで島巡りをしているのだろうか。

もう一つ、私が会った韓国の人々に比較的好くある傾向がある。それは、写真を印刷して手渡した後、写真をもらえることが意外だったのであろう、



何らかの「謝礼」をする人がいた。多くの場合缶やペットボトルのジュースのようなものが多かったような気がする。それを私はだいたい断るが、この運転手さんの時も断った。でも、冗談半分に酒ならいいよと言った。そしたら、OK と私を屋台に手招きし、出てきたのがこれ。緑色の瓶が韓国でよく見る焼酎。平皿は日本でいうお好み焼きのようなもの、チジミとっていいのだろうか。



その屋台の女将さんが赤い服の人。この女将さんとも昨年の訪島以来顔なじみになった。



港広場でおしゃべりしていたら泥水がどどどと流れてきた。消防用のホースで路面の土ぼこりを洗い流していたのだ。

鬱陵島の道路はコンクリートで舗装されている。車は斜面を

走るのでコンクリートを削って粉じんが出やすいのかも知れない。

夕食は오삼불고기。この店、どこだったかなあ。入った時、



誰もいなくしばらく待っていたら現れた。

韓国にはキリスト教を示す十字架が大変多いと感じたので韓国のキリスト教について調べてみた。といっても一冊の本しか読んでいないが。浅見雅一、安廷苑（「韓国とキリスト教」 中公新書 2173 2012年 中央公論新社）によると、キリスト教浸透の要因を次の四点挙げている。

- (1) 韓国の原信仰が一神教的要素を持っていたので、一神教であるキリスト教を受容する下地となった。
- (2) 朝鮮王朝の朱子学の理気二元論には、キリスト教の世界観に類似する点があった。
- (3) 儒教の倫理を重視する姿勢が、キリスト教の倫理への接近を容易にした。
- (4) 植民地時代にキリスト教が抗日独立運動の精神的支柱となっていた。

このうち(4)については「キリスト教が『独立』という政治目標、そして『民族的苦難』から救われる選民思想に結びついたことによって、民族意識を覚醒させることが可能になったのである。そこから、キリスト教が韓国の民俗宗教としての色彩を帯びていったのである」といっている。

韓国の各宗派の割合と信者数は次のように推定される。

宗派別信者数の推定

宗派 <sup>1)</sup>	割合 (%) <sup>1)</sup>	信者数 (万人) <sup>2)</sup>
無宗教	46.7	2250.5
仏教	22.8	1098.7
プロテスタント	18.3	881.9
カトリック	10.9	525.3
儒教	0.5	24.1
園仏教	0.2	9.6
その他	0.5	24.1

1) 韓国統計庁 2005年（「Konest 韓国の宗教」[https://www.konest.com/contents/korean\\_life\\_detail.html?id=2531](https://www.konest.com/contents/korean_life_detail.html?id=2531) から引用）

2) 2005年の韓国人口 4819万人に割合かけた数値。韓国人口は「世界経済のネタ帳」([http://ecodb.net/exec/trans\\_country.php?d=LP&c1=KR&c2=JP](http://ecodb.net/exec/trans_country.php?d=LP&c1=KR&c2=JP))

から得た。

上述の浅見雅一、安廷苑によれば、韓国内の日本の宗教団体数は 18 教団 192 万人で、うち韓国創価学会 148 万人、天理教 27 万人という。これらの人々は上の表のどれに属しているのでしょうか。創価学会は仏教であるから、多分仏教の項、天理教は仏教ではないのでその他の項に入れると数値の整合性があやふやになる。



第五日 3月20日(月)

## 最終日の新しい出会い

鬱陵島最終日。浦項行きのフェリーは15時30分発。11時からラさんが私を昼食に招待してくれていた。それ以外は特に予定は無かった。

朝トイレに座っていると誰かがドアをドンドンと叩いた。あわてて切り上げてパンツ一枚のままドアを開けると、そこに民宿の女将さんと文具屋の이정탁さんがいた。何事かと驚いたが、이さんが誰かに電話して私に取り次いだ。相手はパクさんという人で日本語を話した。確か日本の船に乗っていたようなことを話していたと思う。いずれにしても電話では込み入った話ができないので、10時に이さんの店で会うことにした。

独島ペンションをチェックアウト。あまり物は詰まっていないが、大きなリュックは前日教えてもらったとおりフェリーターミナルのコインロッカーに預け、李さんの店へ行った。



店に現れたのは박용수朴龍洙さん。名刺を見ると향우촌郷牛村代表とあった。レストランのようだ。予め用意していた釜山の文集とチラシを手渡し、日本のことを知っている人がいたら紹介してほしい、とお願いした。



朴さんと李さんは私を「옛군수 관사 旧郡主官舎」に連れて行ってくれた。ここは前を通ったことはあったが入っていたのかどうか分からなかったので外から写真を撮って通り過ぎた。今回は中に入ることができた。建物は展示場になって

いて、主に朴正熙元大統領、当時は議長だったのか肩書きは議長と表現されていたが、その訪島の記録が展示されていた。門の上の白い文字は「朴正熙 1962 年鬱陵島訪島—旧郡主官舎—」というようなことが書いてある。この門をくぐるとすぐ左に朴元大統領がこの官舎を訪問した時の写真が展示されている。上部のハングルは「増産 | 農漁村の開発は私たちの力で | 再建」と書いている。



展示場管理人の〇さん。名前のメモが見当たらない。彼女は当初写真を撮らせてくれなかったが、この日本人は問題ないよ、といったかどうか知らないが、朴さんが何か言うと写真撮影を OK してくれた。

私は日本的なものに興味があったのでその写真をいくつか紹介する。

正面入り口。玄関は小さく、建物全体も比較的小さい。板壁と戸袋、そして灯籠は日本的だ。

この館で最も広い部屋には、おもてなしの宴会だろうか、座敷机には料理が並んでいた。部屋の造りは床の間、違い棚、長押、障子など典型的な和室だ。座敷机はちょっと日本風ではない。



外に出ると防空壕があった。私は戦争の体験はないが、今住んでいる日本の家にも防空壕の跡がある。その防空壕は奥行き 5m もない小さなものだ。中は涼しく、小さい頃、夏になるとその中で兄貴と将棋を指して過ごしたことを覚えている。私が 11 歳の時だったと思うが、





わが家は畑地に建てられた。きっと、戦時中に畑作業をしている時に空襲があった時の逃げ場であったろうと思う。若松のアメリカ軍の焼夷弾が降ってきた、という話を聞いたような気がする。戦争は繰り返してはならぬと改めて思う。



さて、庭には添水（そうず、別名、ししおどし）、灯籠があり日本庭園の作りとなっている。かつてはこの庭から道洞の港が一望できたという。郡主の館だからそのような場所が選ばれたに違いない。

写真右、左が李さんで、右が朴さん。朴さんは私より4つ、李さんは12も年上だ。なのに二人の髪の毛は黒くかつ多い。見た目も若く見える。下の写真は、旧郡主館跡に来る前に朴さんが日本の建物だと教えてくれた家。作りとしては、許さんがいる歴史文化体験センターと似ている。ガラス戸には次のような文字が見える。



도장 대성사 (塗装大成社)  
경북커텐 (慶北カーテン)  
옷수선 (洋服修繕)

11時少し前、李さん、朴さんと別れた後、ラさんの教会に行った。教会を少し下ったところの食堂で昼食をご馳走になった。ラさんは食事前に小さな声で何か祈りをしていたが、私はそれに気づかず先に箸を手にしてしまった。まずいと思って箸を下ろしたが手遅れだ。

ラさんは、私が何のために文集を作るのかいぶかしげだった。このことは先日ラさんを訪ねた時説明し、文書で示したつもりだったが、納得してもらってなかったようだ。私は、日本人が鬱陵島でどんなことをしたのか事実を知りたい、それは日本人と韓国人の友好のためだ、というようなことを答えた。それでもまだ納得いかない様子だった。日本の支配の下ではひどいこともあったと思うが、漁業関係では技術の交流もあったと聞いている。その辺りのことも含めて日本人の鬱陵島での振る舞いを知りたいのだ。

信仰の話も出た。敬虔ではないが仏教思想の方が私にはしっくりいくと話した。独島の話も出たが、私はそれには乗らなかった。いつも韓国の人々にはいうことだが、互いに政府発表の偏った情報しか持たず、それも少ない我々が議論しても実りはない。

ラさんとの昼食は13時前に終わった。私は被写体をさがしながら道洞の港の方へ下っていった。旧郡主の館を少し下ったところにこんな家があった。



きっと日本式家屋だと思う。このような感じの家は近くに数軒あった。今度訪島した時は意を決して家を訪ねてみようと思う。この家は日本家屋かと。また何か新しい出会いを期待しよう。

道洞は狭い集落だが、前回行った店がどこにあったのかほとんど覚えていない。だが、写真を撮った人の顔はだいたい覚えている。前回の訪問で「刺身どんぶり」と日本語でいってくれた人がたまたまこの店から出てきた。この写真を取った後すぐの下りていって、私はあなたのこ





港に戻るとそこにはフェリーを迎える情景があった。岸壁にはフェリーに積み込む荷物を満載したトラックが列をなしていた。そして観光客を迎えるバスが港広場に集結していた。3月はまだシーズン前だが鬱陵島は夏を迎える準備を着々と進めていた。

とを覚えているが、あなたは私のことを覚えているか、とあのメモを見せると、写真を撮ってくれた人だろ、覚えているよ、という身振りを示してくれた。ああ、皆さん覚えてくれているのだと嬉しかった。あの店はここだったのだと確認できた。



接岸寸前のサンフラワー号

荷物満載のトラック



去年の6月に来た時と比べると3月はやはり客は少ない。

市場の前では干物を作っていた。何かと聞くと「イーメンズ」と教えてくれた。イーメンズが何か確認していない。



写真はこれで終わり。

道洞発 15時30分。フェリーの改札を待ち、フェリーにおとなしく乗って浦項まで3時間半辛抱した。今回は「優等席」を選んだが、かなり席が空いていた。こんなことなら、もっとやすい一般席を購入し、船が出た後優等席の空き席に移動すればよかったと思う。日本の特急列車のように検札に来るわけでもなし。

今回も浦項から釜山まで帰った。フェリーを下りてタクシーを探していたら、男性から声をかけられた。バスターミナルに行く客を探していたようだ。すぐにその男の車に乗ったのだが、すでに先客が4人いて私が5人目だった。私で満員となり車は出た。以前も書いたが、運賃は割り勘ではなく、みんな同じ通常料金を払った。乗り合いタクシーは乗客にとってはメリットがない。日本人の私はこれが悔しい。

浦項（バス）⇒老圃（地下鉄）⇒釜山は特に思い出すことがない。ホテルは韓成ホテル、新しい名前は **Business Hotel Busan Station**。前に見た時は工事中だったが、模様替えをし、名前が変わったが何があったのだろうか。夜の9時半くらいにチェックインしたが、見知らぬ女性が受付にいた。建物はあまり変わった感じではなかったが、廊下の見通しがよくなったような気がする。以前は自分の部屋以外にどれくらいの部屋があるのか無いのか見当がつかないような建物の構造だった。

明日は光州へ行ってみようと計画している。

第六日 3月21日(火)

## 光州に行ってみた

今日は初めての光州行きだ。光州は大きな都市だし、いつだったか光州事件というようなこともあったし、以前から一度行ってみたいと思っていた。さらに、昨年(2016年)6月に崔貞美さんのお宅で光州 KJ クラブの会長の具書昌と総務の全恵子さんに会っていたので一層その思いが強くなっていた。ただ、今回は時間的な余裕がなかったのでバスで行って帰るだけのお試しの旅を計画した。

沙上(ささん)の西部バスターミナルから光州行き的高速バスが出ている



と聞いていたので、まずは沙上に向かった。乗車券の控えを見ると10時40分発の光州行きに乗っている。多分8時くらいにホテルを出たと思う。

左の写真の左端の窓口が高速バスの切符売り場。そんなことが分からなかったので右側の窓口で「光州」というと、あつち、というゼスチャー。掲示をよく見ると「고속버스 승차권 발매 Express Bus Ticket Counter」と書いてあった。右側は「승차권 발매 Intercity Bus Ticket Counter」とあった。よく見ると理解できるのだが、ぱっと見には区別がつかない。まだその程度のハングル能力だ。

ターミナルは大きいからいろいろな店があるが、日本でも聞いたことのある「다이소」(ダイソー)があった。店内に入ってみると所狭しと商品が積まれていた。



別件だが、長距離バスは、請求しなければ乗車券の半券を返してくれない。後で旅の記録を整理するのにこの半券がないと困るので、いつも運転手さんに半券をくれと頼む。また、半券だから長い方と短い方があるが、それが会社と乗客の控になると思う。しかし、そのどちらを回収するか運転手によって異なっている。多分乗車券をチェックするのが目的で、半券は回収後廃棄するだけなのであろう、どちらを回収しても構わないのだ。何だか寂しい。



途中の風景。釜山の近郊にはこのような農業用ハウスが沢山ある。

下は果樹園のようだ。



光州まで2時間くらいと聞いていたが、3時間以上かかった。途中どこかのサービスエリアでトイレ停車があった。ここにどれくらい停車するのか、いつ発車するのか分からなかったので、斜め前の座席に座っていた青年

にいつ頃発車するのか英語で聞いた。そしたら、日本語で聞いて下さいと日本語が返ってきた。どこに行っても驚くことはあるが、これにも驚いた。彼は韓国人だったが、連れの女性は日本人だった。彼女によると10分「くら

い」停車すると思います、といった。旅先で日本語に触れると何だかほっとする。よく分からないから早々にバスに戻った。それからしばらくして大都市らしい光景が見えてきた。韓国は高層住居が多い。







ここは既に光州だろうが、目的のバスターミナルに近づいたようだ。写真の建物は多分住宅。

バスターミナルには 14 時少し前に着いた。結構時間がかかった。腹が減っていたのでまずは飯を食った。フードコートでビビンバを注文。どこに行ってもこれが一番いい。値段もさることながら、中身に当たり外れがない。食堂のお姉さんの写真を撮らせてもらって、帰りの乗車券を買い、バスに乗るまでの間すこしターミナルの写真を撮った。



バスターミナル全貌。この建物の向こうにバスの乗り場がある。手前は広場になっていて、何か催し物があるのかステージが設置され、椅子が並べられていた。



帰りのバスの発車時間は 15 時。帰りは少し心に余裕が出てきた。行きよりは少し多めに写真を撮った。

太陽光発電パネル。土砂崩れでもあったのだろうか、パネルがゆがんでいる。韓国でも自然エネルギーの活用が進んでいるようだ。韓国の電力事情は



知らないが、日本のように原発に頼らない政策を打ち出してほしいものだ。アメリカ、ソ連、日本の災害事例を見れば明らかなように、災害現場の復旧はほぼ永久的に不可能だ。その上、生活の場を奪われた人々に対して、許可した行政も運営した電力会社も責任が「とれない」のだ。「とらない」のではなくて「とれない」のだ。

多少の金銭的な「補償」はあっても、奪われた時間と古里はもう戻ってこない。古里を奪われた人々の辛さは察するに余りある。これは金銭で解決できるものではない。

こんな辛いことを国民に押しつけているにもかかわらず、日本政府は原発推進政策を維持し、さらに原発を外国に輸出する後押しをしている。原発のような技術が未確立な部分の多いものは、一旦災害が発生すれば、その時点から新たな技術開発が必要となる。要するに推進する行政も電力会社も「責任がとれない」のだ。「規制基準」に合格したからといっても、それは事故が起らないことを保障するものではない。

トイレ休憩所に来た。この写真は16時34分に撮影。光州を出てちょうど1時間半だ。屋根の看板には次のように書かれていた。

국민평가 우수휴게소

(国民の評価優秀休憩所)

사천휴게소 (泗川休憩所)

ここは泗川という所らしい。過去に何回も長距離バスに乗ったが、どのルートを通ったのか全然知らない。また、バスの名





前は글호고숙と書いている。これはバス会社の名前のようだ。

沙上のバスターミナルに着いたのは18時10分くらい。バスは15時発だったので、光州、沙上間は3時間と10分くらいだ。

これで光州行きの方法はだいたい分かった。この次行く時はもう少し綿密な計画を立てていきたい。片道3時間以上かかるので最低一泊二日の旅を目指したい。

釜山について久しぶりに地下街を歩いてみた。中央駅からチャガルチまで往復した。チャガルチに日本語ボランティアの人がいたが、写真は断られた。崔貞美さんはまだ来ているという。彼女への手紙を言付けて引き返した。

地下街では新しい出会いはなかった。釜山駅まで戻り、顔なじみとなった食堂で夕食。顔なじみになったが店の名前は知らない。

写真を見るとまたビビンパを食べたようだ。店によって小皿の内容が異なる。これも楽しみの一つだ。私はだいたい完食するが、完食するともう一皿？

というように店の人から聞いてくる。ただ、これは嬉しいが、余り追加はしない。ダイコンキムチは追加する。汁物がついているが、味噌汁が出ることもある。この店ではないが、韓国の味噌汁は、というか、私が食べた大衆食堂の味噌汁は煮えたぎっていて、いりこ出汁がききすぎているのが多い。私は余り好きではない。



私の食事中に従業員の賄い食が始まった。夜の8時過ぎ。椅子の上に立って写真を撮った。左上の女性がオーナー、左下の女性が料理人。この人が私に親



しく話しかけてくれる。でも言葉が通じないから、だいたい声かけだけで終わり。右二人はウエイトレス。

この食堂の奥に「古宮参鶏湯」という店がある。一度その参鶏湯を食べたことがあるが、私には贅沢品だった。このオーナー女性はこの参鶏湯の店のオーナーでもあったと思う。



客が来た。顔なじみの人らしい。この人にも写真を撮ってあげた。すると、店の人に海苔をいっぱい袋に詰めさせ、私に持って帰れという。もちろん知らないというのだが、まあ、とにかく韓国の人々の律儀な面をしばしば経験する。

この食堂で夕食をしながら写真を撮って時間を過ごし、ホテルに帰った。ホテルはこの食堂の向かい側だ。だからこのホテルと食堂は私にとっては一對の物だ。ホテルのフロントには一人の男性がいた。前のオーナーの息子の「教授」に似ていたので「キョース?」と尋ねた。無反応だったので違ったようだ。名刺をもらってオーナーが変わったことを知った。それでホテルの名前が変わり模様替えもしたのだ。そして一人の女性。奥さんかと思ったらワーカーとのこと。この人は昨夜フロントの番をしていた。



オーナーは任仁鎬임인호さん。前のオーナーの息子さんもこんな感じの人だった。



第七日 3月22日(水)

帰国：大邱から福岡へ

帰国日。手元に残ったバス乗車券を見ると釜山発 8 時 30 分。これからするとホテルを 7 時前には出たと思う。バスターミナルは沙上ではなく老圃、地下鉄釜山駅から直通で終点だ。バスの運転手は半券を切らずに全部私にくれた。

この乗車券を見て「謎」が解けた。左側の半券には승차권 (회수용) [乗車券 (回収用)]、右側には승차권 (승객용) [乗車券 (乗客用)] と印刷されている。この時も私は乗車券をくれというとそのままくれた。運転手 (会社) は、客が乗車券を購入しているかどうかだけが問題なのだ。老婆心ながら思う。発券窓口では何人の客が東大邱行きの切符を購入したかは分かる。しかし、半券を回収しないとその内何人が実際に東大邱行きのバスに乗ったかどうかは分からない。これって、管理上問題は無いのかしら。行方不明者が出た時など捜索の手がかりが少なくなる。

釜山-大邱の高速バス路線の距離は 144km くらい。その料金が 6700W、これは日本円で 670 円くらいだから日本のバス料金に比べるとかなりやすい。

東大邱には 10 時過ぎに着いたと思う。大邱空港までタクシーで行ったが、10 分くらいで着いた。もっと離れていると思ったので驚いた。実は、このバスターミナルと空港との距離感がなかったの、浦項に行く時、空港からタクシーで一万円以上かけて行った。馬鹿なことをしたと思う。

승차권 (회수용) No. 13869201				승차권 (승객용) No. 13869201			
부산		101.5 동대구 고속		부산		101.5 동대구 고속	
요금 6,700 원		연금 (소득공제)		Busan		Dongdaegu	
출발일		출발시간		좌석		운송 회사	
Date of departure		Time		Seat NO.		Express co. Platform	
2017.03.22		08:30		17		천일	
승인 6,700		20170322-700-03-0105		70090117		승인번호 023077818	
(주)천일고속		[08:16]		승인 6,700		구매자 010****1234	
출발터미널: 부산중앙터미널		부산중앙터미널		가맹점사업자번호: 1148201186		연금 (소득공제)	
부산중앙버스터미널		구매자 010****1234		※유효기간: 당일 지정차에 한함 [08:16]		20170322-700-03-0105	
		007323		고속회사: (주)천일고속 604-81-00854		연금영수증문의 ☎126-2	
				부산중앙버스터미널			



朝ごはんを食べていなかった  
ので空港で食べた。二階に食堂  
があったが、どんな食堂がある  
かうろうろ探していると、どこ  
かの会社の女性事務員と出会い、  
こちらには何もありませんよ、  
食堂はそこだけ、という。仕方  
ないのでその食堂に入った。こ  
こで食べたのがまたビビンパ。伝票を見ると머섯불고기비빔밥 (キノコ焼肉  
ビビンバ)、9000W。時間は 10 時 20 分くらい。飛行機は 14 時だ。まだだ  
いぶ時間的な余裕があった。でも、写真がないので余りうろうろしていない  
ようだ。



空港待合室。どこの空港もだ  
いたいこんな感じだろう。飛行  
機へ荷物の積み込みが始まった。  
誰かがコックピットの窓ガラス  
を拭き始めた。あそこの窓はこ  
んな風に開くのだ。初めて見た。  
それにしても正面通りにまでは  
手が届かない感じだから、そこ  
はどうするのだろうか。汚れた  
まま飛行機は飛ぶのかしら。

これ以後の写真はないので、  
思い出もここで終わりとする。